

令和4年度 第2回桐生市青少年問題協議会 結果報告

日 時：令和5年2月14日（火）14：00～15：15

場 所：青年の家 講堂

出席者：荒木恵司、丹羽孝志、江原勝則（代：吉沢真一）、中村清、入澤康行、松島宏明、青柳明美、阿部誠二、上原敏行、高橋浩昭、蛭間好江、周藤寛、白崎あつ子、青木講一、加藤秀幸、橋本繁栄、野田玲治、高松富雄、
渡邊真宏、金子公江（学校教育課）、小山敏恵、星野正史、金子秀明、下山秀人、
新井礼子、木村裕一、岡田和久、岡戸隆也、岩沢誠典

欠席者：久保田裕一、間中一枝、台善一

<全体会> 14：00～14：25

1 開 会 司会：星野課長

2 挨拶 荒木市長

3 報 告

- ・桐生市いじめ防止対策として、桐生市教育委員会の取組（資料1）、いじめ緊急対応マニュアル（資料2）、桐生市いじめ防止子ども会議の結果報告（資料3）をもとに、いじめ防止対策の成果と課題について報告した。
- ・「桐生市明るい家庭・地域づくり運動」推進市民大会が、3年ぶりに参加人数を制限し、新型コロナウイルス感染症対策を講じて、コンパクトな形で開催できた。家庭健全化運動推進モデル地区については、11区（境野地区）が発表を行い、この発表を最後に休止となる。来年度以降の推進市民大会については、以前の本会議で承認された桐生市青少年愛育運動推進会議にて検討することになっている。
- ・令和3・4年度桐生市青少年問題協議会の報告について、子ども対策部会長より報告があった。

4 協 議

- ・ポスターの作成及び配付について、事務局が説明した。平成30年度の本会議にてポスターを作成し、学校や公民館等に配付した。令和2年度の本会議は、新型コロナウイルス感染症対策にて中止となった。令和3・4年度の本会議は答申型から協議型に変更された。今回、4年間で古くなったポスターの内容やデザインを変更し、新たにポスターを作成・配付することを提案した。

A・B案の2つを提示し、委員の意見を考慮したうえで、決を取り、14対3でA案が可決された。A案をもとに、ポスターの作成・配付することが決まった。

5 閉 会 司会：星野課長

<専門部会> 14:25～15:15

こども対策部会（4号室）

- 1 開 会 司会：星野課長
- 2 挨 拶 松島部会長
- 3 協 議

委員：資料P18～前回の議事録があり、振り返りながら話を進める。前回、7月に臨海子ども会がこの時急遽中止になるなど、コロナ禍の影響はまだあるが、小中学校では修学旅行に行くことができた。地域のつながりはまだまだできていない。

子どもたちが置かれている環境はネット中心になっている。家庭・地域対策部会では、子どもがゲーム中心（昼夜逆転）で寝不足、子ども対策部会ではボーイスカウトの活動がほとんどできない。青少年センター運営協議会では、非行の実態としては、ネット環境やSNSの利用、スマホの所持率も中・高では100%に近い。そのような状況を踏まえて、話し合いを深めていければと思う。東部児童相談所より相談事項もあるので、お願いします。

委員：SNSの問題について、児童生徒の生活と規範意識に関するアンケート調査（10月12日～25日）を実施。（小5・6年生で14校、中学1～3年で10校、高校1・2年で6校、計30校で6571人が回答）

スマホの所持率

小学5・6年生	36.0%（620人）
中学1～3年生	69.8%（2,131人）
高校1・2年生	97.2%（1,729人）

SNSでいじめられた

小学5・6年生	1.0%
中学1～3年生	3.4%
高校1・2年生	3.7%

SNS以外でいじめられた（被害者）

小学5・6年生	4.4%
中学1～3年生	4.7%
高校1・2年生	3.4%

SNSでいじめた

小学5・6年生	0.3%
中学1～3年生	0.9%
高校1・2年生	0.7%

SNS以外でいじめた（加害者）

小学5・6年生	1.0%
中学1～3年生	0.7%
高校1・2年生	0.7%

委員：コロナ禍における、いじめの実態、SNSの利用等、様々な場面で変化が起きている。良い悪いではなく、現象として起きていること。人との接点がなくなったことが原因で起きていることもあるかもしれない。

委員：ジャンボリー（ボーイスカウト）は埼玉ではサテライト分散型開催。東京はできなかったが、少しずつ活動が戻ってきている。

委員：中学校では、行事は感染対策を講じながらほとんど開催できている。欠席者は増加している。喉が痛いだけでも欠席するようになり、学校も少しでも症状があれば登校を控えるようお願いしている状況であり、休むことへのハードルは低い。A校では、毎日25人程度の欠席者がいる。不登校の生徒も含まれるが、感染対策に関する欠席者と合わせても、20人を下回る日はほとんどない（常態化）。教室には常に2～3人の欠席者がいて、全員が揃うことはほぼない。

委員：B校ではコロナの影響はそれほど大きくなく、A校ほど多くの欠席者はいない。学校規模にもよると思われる。地域としても、街中よりも交流は少ないことも影響しているかもしれない。

委員：C校でも行事はできている。全校の10%まではいかないが欠席者はいる。感染拡大の時は、「喉が痛い」状況でも登校してしまう生徒がいた。コロナ禍以前であれば、「（無理して）頑張ってきたね。」だったが、現在は「無理して来てはダメ。（症状があったら、欠席すべき）」という意識に変わってきている。

委員：以前であれば、喉の痛み、頭痛、微熱程度であれば保護者も登校させ、学校側も受け入れていた。しかし、現在は全く逆の状況であり、実際のところ、「本当に症状があるのか」、「別の理由があるが、コロナの症状を理由で休んでいるのか」わからない。子どもたちが弱くなっていると感じる。

委員：背景としては、失敗すると大変なことになるという不安感があるのではないかと。様々な場面で、子どもだけでなく大人も不安を感じる事が多くなり、不安が市民権を得たような感じがある。若い職員が不安を口にすると、以前であれば「不安を口にしない（顔に出さない）」と指導したこともあったが、今は不安があれば積極的に相談し、管理職は相談しやすい環境をつくる事がより強くなった（ハラスメント防止）。色々な場面で、「受け止めよう・大事にしよう」ということが市民権を得た状況では、他人の発言（たった一言）が大きな問題につながる事が多くなった。

委員：得体のしれないものが背景にある気がする。先日開催された青少年センター運営協議会で警察からアンケート結果の話が出たが、現象として起きていることは理解できるが、なぜそのような現象が起きるかがはっきりしない。孤立している状況が多いのだろうか。

委員：子どもたちの不安感が解消されない。SNS等の問題になっている内容について、善悪の判断は頭の中では理解しているが、ネットの世界＝現実世界から外されてし

まうことへの怖さから、やらざるを得ない状況に追い込まれている。また、SNSによって寂しさを紛らわせる効果もある。虐待サバイバーの話では、問題を解決してもらいたいというよりは話を聞いてもらいたい、一人の人間として話を聞いてもらいたいという願いがある。

※虐待サバイバー：幼少期より虐待を受け、大人になっても苦悩している人

委員：子どもの中に不安感があるのか。親にも不安感があるのか。

委員：子どもの間違いを保護者が受け止めてほしい。本来、子どもは間違っても良いものがあるが、大人に受け止める余裕がない。さらに、世の中が間違いを受け入れられない（許さない）状況になっていることもある。

委員：SNS関連では、小学生が20代の女性に会いに京都まで行った事例がある。軽い気持ちでSNSを利用しているケースがある。今回は、保護者が気づいて、大阪で引き渡しをすることができた。

委員：色々なイベントは開催（復活）してきているが、子どもの参加率が低い。原因としては保護者の考え方が大きく影響している。コロナ禍で、子どもたちは参加したいが、親が参加を控えてしまう。ボーイスカウトでは年齢制限があり、時期を逃すと参加できなくなるものも多く、経験すべき機会を逃してしまふ。参加していても、咳や頭痛、微熱等の症状が出れば、すぐにリタイヤしてしまう。ボーイスカウトの活動は、大人数で行う面白さ、少人数では体験できないものがあり、参加者が少ないとイベント自体が実施できないという問題もある。

委員：子育連も同様で、活動ができていない。不安感が蔓延し市民権を得た状況であるとの話が出たが、きっかけはコロナ禍であったとは言え、現象としては元々あったものもある。

委員：不安感の例として、卒業式にマスクを外す案が出ているが、現状としては感染の不安感だけではなく、3年間マスクで過ごすことが当たり前となった生徒たちにとっての素顔を見せることへの不安感もある。知られていなかった部分を見られる、見せるということは、思春期の子ども（特に女子生徒）にとっては、大きな不安・ストレスではないかと思う。

委員：コロナ禍以前から、マスクを外せない子どもは存在していた。

委員：不安症の子は、以前からマスクを外せなかった。いきなり、マスクを外しても良いとなっても、外せない（外さない）子どもは多いのではないかと思う。

委員：コロナ禍でマスクの着用が市民権を得たので、外しにくくなっている。イベントへの参加率の低さについても、参加すれば楽しいとわかっていつつ、保護者の負担や考え等で参加することが難しい場面でも、コロナ禍を理由に不参加を言いやすくなってきた。

委員：問題協議会を別の視点から考えると、「子どもたちの声」が聞こえてこない。教育委員会では子どもたちの声（考え）という部分で、何か気づくことはありますか。

委員：コロナ感染のピークが下がり、今年度は様々な行事が開催できるなど状況は変化してきている。桐生市子どもいじめ防止会議では、学校の中でコミュニケーションを増やしていきたいという意見は多かった。

委員：大人の世界もコミュニケーション不足。若手教員の休職者が多いという問題がある。コロナ禍で懇親会が全くできていない。懇親会が全てとは言わないが、職場とは違う場面で、先輩からの助言を得たり、同僚と本音を話せる機会があったりすることで、精神的なストレスや不安を解消できる面もあると思う。子どもたちも同様の不安がある。本来の学校は集団で活動する場面が多いが、今は「群れない、密にならない」と指導している。友達との友好を深める場面でも「離れなさい」と指導したり、給食の時間も黙食したりとコミュニケーションを楽しむ場・時間が奪われている。学校での楽しい時間が減ったことで寂しさが募り、SNSに救いを求めたとしても不思議はない。コロナ禍で大きく変わってしまった点である。

委員：スマホの所持率はどんどん上がり、アンケート結果では、高校生はほぼ100%持っている。SNSが当たり前の世界で生きていけば、色々なところで繋がったり、つながりを求めたりするのは致し方ないと思う。その中で、高校生のいじめと感じている意識（加害者0.7%）は、小・中学生と比較すると低く感じる。

委員：確かに低いと思う。自分の子ども（大学2年・高校2年）はゲーム好きで、毎週土曜日23時～翌3時ぐらいまで、友人5人とオンラインゲームをやっている。個人的には、良いか悪いかで言えば、良い影響を与えていると考えている。大学の授業もオンラインが多くなり、中学時代からスマホを与え、慣れていたことで大きな問題もなくスムーズに授業に参加できた。スマホにしても悪いものだとして与えないでいると、社会の流れについていけずに、いずれ違う問題や悩みを抱えることになってしまうと考える。

委員：世の中が大きく変わり、今までと価値観が逆転してしまった。就職活動も面接ができないため、オンライン面接になった。全国各地へ移動することもなく、どこであってもオンラインで実施できるメリットもある（距離を感じない）。付き合っている人（彼氏・彼女）と別れる時や会社に遅れる時もLINEを使う。

電話をすれば済むことも、電話をする前にLINEで電話して良いかを伝える。時代も変わり、TVを見ないでネットニュースや動画配信が中心。SNSでも短い文しか使わないので、短い文でしか思いや内容を伝えられない難しさがある。いじめについても、言葉を知らないで、相手がどう思うのか、感じるのかがわからない（想像できない）拙さがいろいろな場面で出てきて問題が起こる。さらに経済面や環境面に格差が広がってくれば、お互いを理解することはより難しくなる。

委員：青少年問題をどこまでのくりにすれば良いのか、何をテーマにどの方向へ議論を進めるのかは、いつも悩むところで非常に難しい。答申ではなくなり協議が変わったことで、問題を掘り下げていくことができるようになってきた。一方で、表層的な現象の羅列になり、掘り下げてみたところで背景になるものが何かによって良いことか悪いことかは判断が難しい。子どもたちにとっても、コミュニケーションの大切さを重視して、問題ととらえる子どもいればそれほど問題と感じていない子どもいる。昭和・平成の価値観で上から押しつけて良いのかという課題もあり、次年度以降にむけて、ご示唆を頂ければと思っている。

委員：コロナ禍でICT活用、GIGAスクール構想が一気に進み、グループ活動や話し合いができない代わりに、タブレットで意見交換をすることが主流になってきた。5月からコロナが5類になり、コロナ禍以前の生活が可能になると予想できる。一方でこの3年間の生活様式が継続する可能性も十分あり、どのように子どもたちが変化をしていくのかを見守りながら、この会議においてもポストコロナとして話し合いができたらいと考える。

委員：問題の掘り下げとともに、子どもたちの生の声を聞いてみたいと考えている（アンケートでも可）。また、問題ばかりを話し合うのではなく、理想の形・目指す子どもたちの姿、そのための手段や方向性など前向きな考えも聞きたいと思っている。

委員：子どもの権利の尊重を考えると、児童相談所に来る生徒が学校へ戻るときに、不登校であったり、茶髪やピアスをしていたりする生徒に対する学校側の対応がどのようなものか聞いてみたい。不登校の生徒が何とか学校へ来たのに、茶髪やピアスをしているという理由で学校へ入れないといった措置等は、子どもの権利を考えた時にどうなのかと思っている。

委員：10年以上前であれば、そのままでは学校に入れない、髪を黒く染め直し、ピアスを外してから再登校を促したと思う。現在は、子どもの学ぶ権利等も考え、学校へは入れる。ただし、他の生徒と一緒に教室で授業を受けさせるわけにはいかないのので、特別教室にて話をする。その場で担任や生徒指導担当等と話し、本人の意思を確認し、課題を与え勉強させたり、教科の先生が教えたりする。さらに、保護者とも話し合いをしたうえで、髪形やピアス等を直せるのであれば、時間をかけてでも

指導をしていく。直せない場合、みんなと一緒にの教室で学ぶことは難しいが、特別教室での学習は認める等の学校側の考えを伝える。また、生徒や保護者の考えや状況を丁寧に聞きながら対応策を考えていく。色々な理由や家庭環境等もあり、すべて同じような対応はできないが、話し合いを続けながら、どこかに着地点を見つけ、指導を進めている。

委員：昔は学校に入れない指導もあったとの話があったが、なぜ学校へ入ることがダメなのか。子どもの権利を考えるとうまく説明がつかない。他の生徒に被害を与えたり、不快感を与えていたりするのであれば、適切な指導をしなければならない。しかし、茶髪やピアスをしていることだけで不快感を与えているとは言えない。子どもの表現の自由でもあり、良いのではないか。以前、カラーコンタクト禁止という学校もあったが、自己管理ができれば良いとなった例もあった。

委員：不登校であれば、教室へ入れないことはない。それ以外の要素があれば、学校としては他の生徒の安全管理・学習する権利を確保しなければならないので、色々な措置が考えられる。話し合いもせず門前払いで学校へ入れないということはない。

委員：例えば、タバコを吸って、仲間を数人連れている状況であれば、学校へ入れるわけにはいかない。単に学校へ入れないということはなく、それまでの経緯や指導があって、学校へ入れないことになることはある。

委員：そういったケースでは、警察でも指導し、児童相談所へ受入れをお願いしたり、学校でも対応してもらったりした。いくつかの段階があり、最終的に受け入れなかったという形になったのではないかと思う。最初から茶髪・ピアスをしているから学校へ入れないではないと思う。生徒と学校での話し合いを繰り返した経緯があつての状況がある。

委員：そのことが、子どもの権利を守るという観点から考えるとどうなのか。最初に子どもの権利を優先した上で、対応してもらえないものか。もう少し配慮をしていただけるとありがたい。

委員：個々に委ねられていること、それぞれの立場や関係機関での対応があり、ケースバイケースで100%の正解はない。そういった様々な意見をこの会議で伝え、話し合うことがとても重要な意味をもっている。今後も協議を重ねていきたいと思う。今回で、2年間で4回目の会議が終わり、次年度は改選となるが、引き続きよろしくお願いたします。

家庭・地域対策部会（2号室）

- 1 開 会 司会：金子係長
- 2 挨拶 青柳部会長
- 3 協 議

委員：コロナ禍で子どもたちを取り巻く環境が大きく変わってしまった中で、新しい形で様々なことを構築していくことになる。基本方針としては、地域・家庭・学校が子どもたちをどのように見守り・育むべきかを関係機関・団体の立場からご意見を頂きたい。地域のコミュニティの確立、学校や保護者との繋がりから子どもたちの幸せや喜びを得られるような環境づくりを考えていきたい。

委員：地区は子どもの人数は多いほうではある。いろいろな行事で来賓として招待されていたが、コロナ禍でなくなってしまった。地区のマラソン大会は3年間中止であるが、今年はできそうである。10団体協議会で、子どもの生活や学校の様子等について情報交換や共通理解を図ってきたが、ここ数年はできていない。

委員：民生委員児童委員では、朝の挨拶運動（7：30～8：30）、町会の有志の方が、帰りは見守り活動を行っている（ジャンパーを作成）。養老会で幼稚園、小・中学校と高齢者の交流を盛んに行っている。

委員：保護司の活動は非行少年の生活指導が主となるが、現在、市内における未成年の保護はない。学校訪問を行い、子どもたちの様子を伺っている。いじめ等の問題を防げるような指導を行っている。更生させる指導よりも未然防止の啓発活動が主流である。市内では、76名の保護司がいるが、対象者（非行少年）を担当しているのは20名程度と少なく、保護司になっても担当したことがない人も多い。そこで若手とベテランが組んで、対象者への面談等をは行っている。しかし、コロナ禍で面談等も難しい場合が多くなり、電話・メールを活用しているが、面と向かって話をする訪問をできるだけ実施するようにしている。引きこもり傾向で問題を起こした対象者は執行猶予3年、生活環境調整、刑務所で実刑を受けている人が優良な生活をしていると仮釈放となり、生活する場（家）を選択できる。仮釈放された人の希望を通すために、その場（家）の経済状況や更生できる環境等を調査している。

委員：更生保護女性会では、下校時の見守り活動、薬物乱用防止教室（たばこの害）を中心にしている。保育園の先生もいるので、各学校で本の読み聞かせを再開したいと考えている。

委員：月2回補導、標語の募集、優良少年の表彰を行っている。事業所の社員にも関心を持ってもらえるような活動を行っている。コロナ禍の影響もあるが、子どもが街中にいない。JR 桐生駅や新川公園でスケボー少年たちが見受けられる程度。下校時の

児童生徒の挨拶や返事も良くできる素直な子が多い。大人の無灯火やスマホのながら運転が多い。子どもの手本となる大人のほうに問題がある。

委員：補導では、さわやかな子どもが多く、非行傾向はほとんど見られない。声かけ程度で済んでいる。学校が始まり学生が多く見られると街に活気があって良いが、それでもJR 桐生駅高架下のファミリーマートで高校生が溜まってしゃべっている程度で子どもたちの姿を見ないことが多い。10団体会議が開催されず、地域の情報が不足している。学校評議員を務めていた時は、学校の情報が得られていたが、今は何もなくなりわか

らないことが多い。地域・家庭・学校の観点から見守りを考えた時、補導する時間帯（夜）は子どもがいない。一方、毎朝登校時間に子どもたちに会う交通指導員のほうが、挨拶をしながら子どもの様子を見ているので、変化に気づくのではないかと考える（虐待やネグレクトなどは表情や服装等でも気づく）。日頃の様子を見ている人が、変化に気づき情報をつかむ。また、私たちが街中を移動するときも意識を変えれば見方も変わり、情報を得られるかもしれない。

委員：PTAが地域と学校を繋ぐ役目としての意味がある。学校の中に地域を巻き込んでいくと面白いことできるという講演を聞いて、アイデアが出てくるが、PTA内にも温度差があり、小中学校を地域がどう支えていくかについて難しい面も当然ある。例として、学校でマラソン大会を開催するにあたり、PTAや地域の人が沿道に立っているだけでも、安全面につながり、子どもへの声掛けが走る児童の意欲や力となっていると感じている。具体的な案は明確に出てはいないがヒントにはなっている。また、この会議で各関係団体との繋がりができることで、PTAにできることが見えてくるとも感じている。ただ、漠然とした話題では、理解やつながりが見えにくくなるので、議題を絞って話し合いができれば、アイデアが浮かび、協力体制が築け、学校の手助けとなるのではないかと考えている。要望としては、この議事録を公開して、多くの方に知ってもらいたい。活用するためにHPに掲載、情報の整理をしてほしい。保護者との共通理解につながり、話題として挙げやすくなる。検討をお願いしたい。

事務局：本会議は報道にも伝えているので、発表することはできる。一方、公開されることで皆さんが発言しにくくなるのではないかという懸念もある。検討を重ねて、より良い形で情報発信できるように考えていく。

委員：補導では外で子どもを見る機会が減り、非行についてもほとんど見ない現状がある。一方、スマホやタブレットの所持率は高く、中学生の8～9割がスマホを所持している状況がある。反面、で保護者の考えで、中学生にはスマホを与えていない家庭も多くいる。SNSの正しく安全な使い方を伝えることが重要。情報モラル講習会、おぜのかみさまの指導を通して親子でコミュニケーションをとることが重要。市内の小・中・義務教育学校では素直な子が多く、落ち着いている。家庭・地域・学校が三位一

体となり、コロナウイルスの扱いが5類になってから新たな課題が出てくると思うので、今から準備・対策を考えていきたい。様々な行事や体験活動、キャリア教育も地域の方との連携や支援は重要である。

委員：学校評議員を長く務めていた時は学校にも足を運ぶ機会が多くあったが、今はコロナ禍でなかなか情報が得られない。授業参観等を見る機会があれば、学校や子どもの様子がわかるが、現状は難しい。

委員：授業参観は実施できるようになってきたが、人数制限をかけている状況。もう少し収まってくれば、学校公開する機会が増えてくると思う。

委員：真剣な議論が交わされて感激している。安心・安全な社会をつくるため、犯罪を未然に防ぐことを様々な団体で行っていることがわかった。学校へ地域を取り込むことの重要性について、視察に行き、学校の中に公民館を移動した事例を見てきた。会議をする場に子どもの声が響いたり、子どもの様子が見られたりすることは、青少年の健全育成を議論するうえでも効果があると思った。子どもたちの非行が少ないとの報告があったが、一方で抑圧されて表面化していないケースもあるのではないかと思った。ある保護司の話で、梅田の緑地公園でスケボー少年たちに来て話を聞くと「駅前や新川公園では警察に排除されるので、ここで遊んでいる」との答えだった。桐生球場（レフトスタンド側）の外周をスケートボードエリアに設定したが、周知されていない。現状や意見を参考にしながら青少年の健全育成に力を注ぎたいと思う。

事務局：地域に顔見知りが増えることが重要。コロナ禍で子ども会の行事もできていない。青少年課では3年間、臨海子ども会が中止になっている。ミニきりゅうという行事では、子ども会議に50人近くの子どもが集まり、ミニきりゅう市長選の公約（マニフェスト）を考えたり、SDG'sの観点から発言したりするなど、しっかりした子どもがたくさんいる。他校の友達ができたり、いろいろな考えが聞けたりするだけでなく、実行委員の大人と深く関わる中で、自分たちを熱心に支援してくれる大人の存在を知ることとはとても意義がある。各地域の支援を、各団体の立場から今後ともお願いしたい。

4 閉 会 司会：金子係長